

北岡伸一著「独立自尊・福沢諭吉の挑戦」講談社 2002 年 4 月 20 日刊を読む

「知徳を貫く『独立自尊』—『独立自尊』とは何か—」

＜第一＞

「人は人たるの品位を進め、智徳を研ぎますますその光輝を発揚するを以て本分と為さざるべからず。吾が党の男女は、独立自尊の主義を以て、修身処世の要領と為し、これを服膺（ふくよう）して、人たるの本文を全うすべきものなり。

○独立自尊が主題であることをあきらかにしている。

＜第二＞

「心身の独立を全うし、自らその身を尊重して、人たるの品位を辱しめざるもの、これを独立自尊の人という」

＜第三＞

「自ら労して自ら食うは、人生独立の本源なり。独立自尊の人は、自労自活の人たらざるべからず」  
○このように、冒頭にたたみかけるように「独立自尊」が強調される。それは、男女関係でも、子女の教育でも重視され、さらに成人してからの自己教育でも重視される。

＜第十二＞

「独立自尊の人たるを期するには、男女共に成人の後にも、自ら学問を勉め、知識を開発し、徳性を修養するの心掛けを怠るべからず」

＜第十三＞

「一家より数家次第に相集まりて社会の組織を成す。  
健全なる社会の基は、一人一家の独立自尊に在りと知るべし」  
○「独立自尊」は社会の構成原理として尊重される。

＜第十四＞

「社会共存の道は、人々自ら権利を護り、幸福を求むると同時に、他人の権利幸福を尊重して、苟（いやしく）もこれを犯すことなく、以て自他の独立自尊を傷つけざるに在り」

＜第十六＞

「人は自ら従事する所の業務に忠実ならざるべからず。  
その大小軽重に論なく、苟も責任を怠るものは、独立自尊の人に非ざるなり」

## ＜第十七＞

「人に交わるには、信を以てすべし。己人を信じて、人もまた己を信す。

人々信じて始めて、自他の独立自尊を実にするを得べし

## ＜第二十四＞

「日本国民は男女を問わず、国の独立自尊を維持するが為には、生命財産を賭して敵国と戦うの義務あるを忘るべからず」

○「独立自尊」は、国家においても重視される。

## ＜第二十六＞

「地球上立国の数少なからずして、各その宗教言語習俗を殊にすといえども、その国人は等しくこれ同類の人間なれば、これと交わるには、苟も軽重厚薄の別あるべからず。

独り自ら尊大にして、他国人を蔑視するは、独立自尊の旨に反するものなり」

○かつて、「文明論之概略」において、福沢は、智徳の進歩を説いた。

その努力は、徳よりも智に向けられていた。

しかし、智が一段落したところで徳の方向に向かったのは、当然であった。

「福翁自伝」においても、「日本人を高尚に赴かせたい」と述べている。

而（しか）して、智と徳とを貫いていたのが「独立自尊」であったのである。

「学問のすすめ」「文明論之概略」その他の福沢の様々な主張は、当時は「文明開化を進めるための主張」として展開された。

晩年のここに、再び今度は、「個人の道義」という形で展開されている。

福沢においては、「智徳は同根であった」のである。

P327~329

## ＜コメント＞

先日、作新学院大学で講義をした際、「リーダーとはどのような人か」「立派な人になるにはどのようにしたらよいか」という質問がかなり多く出ました。「大学時代に読んだ本は何か」という質問もありました。田中正造や、二宮尊徳の「積小為大」、内村鑑三著「後世への最大遺物・デンマルク國の話」等を紹介しましたが、塾生の皆様にも、お気づきのことあれば、どんどんお話してあげてください。

2025年12月14日